



「第四十二回全国中学生人権作文コンテスト」
長崎県大会」作品集

最優秀賞

長崎地方法務局長賞（中央大会推薦）

幸せの見つけ方

島原市立第一中学校 三年 數

奈々穂

私には、人権の大切さを広めていきたいという目標があります。そう思うようになったのは、弟の存在があつたからです。

私の弟は、目に障害があります。視力が両目で0.3ほどしかなく、他の子が難なく読める文字や図が見えにくかったり、文字を覚えるのに時間がかかったりと、生活する上で不便なことがたくさんあります。そんな弟の障害が分かってから、父母の間で決めたことがあるそうです。それは、弟を「幸せの見つけ方」が上手にできるように「育てるということ」です。

弟は、教室の一番前の席でないと黒板の字が見えないので、一年中いつも同じ席です。「みんな席が替わっていいな。」と言います。席替えのくじを引いてはしゃぐ友達への羨ましさや、くじのない自分だけ蚊帳の外に置かれたような寂しさを感じているようです。そんな時、両親はにっこり笑ってこう言います。

「一番前の席になると先生の声がよく聞こえるし、勉強を頑張っていると一番に褒めてもらえるね。先生

と近い席でいいね。」と。すると弟は嬉しそうに「うん。この前ね、図工の時間に……。。」と、先生から褒められたエピソードを生き生きと話し始めました。さっきまで「いつも同じ席でつまんない。」と言っていた暗い顔はどこへやら、「いつも一番前で良かったね。」と、明るく笑っています。

三歳児健診で障害が判明したあの日から、弟は様々な壁にぶつかってきました。心ない言葉を投げつけられたこともあります。そんな弟に今、「困っていることはないの？」と尋ねると、「ないよ！」と笑顔で答えます。困ることや辛いことが全くゼロになったわけではないでしょう。それよりも、両親譲りの前向き思考で、弟なりに幸せの形を見つけ始めているのかもしれない。

弟には、最近お気に入りの絵本があります。それは、ヨシタケシンスケさんの『なんだろうなんだろう』です。その中に「しあわせってなんだろう」というページがあります。

「しあわせってたぶん、外からそのまま入ってくるんじゃないかって、いくつかの材料がくみあわさって、自分のからだの中でつくられるものだと思う。しあわせの材料は年れいや国や時代によつてさまざまだろうし、しあわせをつくる部分は自分であるていどかいぞうできるはず。だから、材料がすくなくても今までとかわってしまっても、しあわせは自分の考え方しだいでも作ることができるんじゃないかしら。『しあわせ』ってなんだろう。」

この絵本を、弟は飽きずにくり返し読んでいます。一緒に読みながら、私はふと自分のことを考えました。私は今中学三年生で、進路について悩んでいます。保育士、臨床心理士、養護教諭など、私には興味の

ある職業があります。しかし、まだ「興味」の段階でしかなく、その職業にどうしても就きたいという強い思いはまだありません。また、将来、大学に進学できるよう進学率の高い高校を目指して受験勉強をしている最中ですが、その受験勉強にも苦戦しています。テストのたびに自分の現在地が数字で表れ、できていないところ、足りないところが目の前に突きつけられる。どれだけ勉強しても自信はなく、プレッシャーから逃げたい自分がいます。この悩みに対する「しあわせ」はどこにあるのでしょうか。

どの職業がいいのか悩むことができるというのは、私が健康体で、その職業に就くための大学進学を望める環境にあるということです。苦戦している受験勉強に対しては、私が集中できるように一人部屋を用意してくれたり、自分だけでは補えない勉強をするために塾に通わせてくれたりするなど、家族のサポートがあります。幸せを見つけようと考えると、悩みの中から感謝の気持ちが芽生えました。

人権の大切さを広めるためにはどうすればいいのかが、分かったような気がします。環境や人に対して感謝の気持ちを持つことで、いじめられている人、障害を持っている人、傷ついている人に対してのアンテナをもっと繊細に張り巡らせることができます。また、感謝の気持ちを相手に伝えることで、人と人との心の距離が近くなります。心を通わせる相手を、傷つけようと思うでしょうか。いいえ、大切にしたい、守りたいと思うでしょう。

これからの私にできること。それは幸せの見つけ方が上手になり、感謝の気持ちを人に伝えること。そしてそれを多くの人に発信すること。これが目標への第一歩です。

誰もとり残されない社会

佐世保市立山澄中学校 二年 寺崎史織

「場面緘黙症」。私は彼女に出会ってこの言葉を知った。家庭では話せるのに学校や職場など特定の状況では声を発せなくなってしまうという、周りから認識されにくい症状ゆえ、本人の性格上のものだと誤解を受けてしまうケースも多い。そのため、世間的にも認知度が低い。私の友人もその一人だ。

場面緘黙症を持つ人に多いのは、症状を理由にからかいやいじめを受けることだ。しかし、六年間共に過ごしてきた小学生活の中で彼女の身にそのような事は起きなかった。ただ、あるのはクラスメイトの無意識的な偏見と静かに進む孤立。いじめこそなかったものの、周りは皆彼女に話しかけようとせず、そういう子だと割り切って一線を引く。私自身も人と関わるのが嫌なのだろうとぐらいに思っていた。はつきりと形を成していないその空気は、誰にも悪気がないからこそ冷たく虚しいものだった。もしかしたら彼女もまた、その現状に諦めを感じ既に割り切っていたのかもしれない。それとも友人関係とは別の何かに喜びを見出していたのだろうか。

そんな中、私が彼女と仲良くなったのは六年生の秋に行われた修学旅行がきっかけだ。班決めでは案の定、既にくつかの仲良しグループに分かれていて、他は一際受けつけない状態。結局空きがあった私の班に彼女が入ることになった。当日、私が他の友達と冗談で盛り上がっていたとき部屋の隅で彼女が必死に笑いをこらえようとしていることに気がつき、「本当はどんな子なんだろう」と興味を持った。そこから毎日声は発さないものの、あいさつを交わすようになり、これまで知らなかった一面に触れた。今まで偏見を持ち、知ることを避けてきたのがとても損をしていたように思える。顔が明るくなり少しずつ心を開いてくれるのがうれしかった。

しかし、一時期彼女は教室に行くのを拒んだ。先生達や私が説得を試みたが強く抵抗していた。そこでふと浮かんだのは、「本当に私はあの子のことを理解できていたのだろうか」という疑問だ。当時私はもつと知りたい、話してもらいたいという心が先走り、彼女が声を出すことや考えを伝えることを急かしていたかもしれない。彼女はそれに居心地の悪さを覚え、私が一人空回りしていたのではないのか。その最大の原因は、知らず知らずのうちに「言葉がないこと」を「意思がないこと」とイコールで結びつけ、変換していたことだ。声はあくまで意思疎通の手段であり、意思そのものではない。言葉を求める前に、彼女にとって理解してもらいたいことは何かを考える心が私には足りていなかった。そして必要だったのは自ら話したいと思える環境と他の理解だ。誰よりも彼女の魅力にひかれた私はその環境をいち早く築き、一番の理解者となるべきだったのだ。

今、世界には社会的弱者やマイノリティに対する差別、SNS上での誹謗中傷、いじめなど数多くの人権侵害の問題が存在する。その全てに言えるのは、同じ立場になり理解しようとする精神が放置されてしまっているということだ。特に偏見には、必ずしも悪意が存在する訳ではないからこそ無意識に人を傷つけ追い込んでしまう可能性がある。「無知」とは最も恐ろしいものだ。だから人は「知る」ことを忘れてはいけない。「誰もとり残されない社会」これが私が思う世のあるべき姿。マジョリティがどんな人にも柔軟に寄り添い、互いの価値観や生き方を認め合うことで築かれると考える。そのために、まずは相手を知ることが理想の世界への第一歩となるのではないだろうか。

中学生になった今、新しい交友関係を持ち勉強や部活動に追われる日々。彼女とはクラスも分かれ再び疎遠になってしまった。今でも時々大丈夫かなと気にかかる。しかし、中学生になって変わったのは彼女もまた同じ。私が思っているより彼女は弱くない。後は周りがどう変わるか。「知る」「理解する」「尊重する」のループで安心できる雰囲気をつくる。私はその輪を一人から二人へ、二人から三人へと広げていきたい。そして今日も彼女に「おはよう」を言う。無言でうなずく彼女がこれからもずっと笑顔でいられるように。

「カナダに行つて思つたこと」

長崎県立長崎東中学校 三年 山口 紗 愛

私は今年の春休みに、学校の語学研修でカナダに行った。カナダは想像以上に多民族が共存している国だった。私のホストファミリーはイスラム教の人々で、断食をしたり、一日のうちに何度も礼拝をしたりしていた。断食中にも関わらず、私たちの夕食を、「作っているとお腹がすくわ」と言いながら快く作ってくれた。また、家庭内では英語ではない言語を話していて、小学校でネイティブな英語を学ぶと言っていた。カナダの第一公用語は英語で、第二言語はフランス語だから、ペットボトルやお菓子のラベルはその二つの言語でそれぞれ書かれていた。学校でも様々な言語を教えていて、自分が学びたい言語を選択して勉強していた。友達の家でホストファミリーは、フィリピン、イランなど様々な国にルーツを持っている家庭だった。学校のエントランスにはその学校に在籍している生徒に関係する国旗がたくさん掲げられていた。現地の高校で、パートナーについてももらい、授業を体験するという研修があった。私のパートナーは、女の子で、彼女が学んでいる歴史とダンスの授業と一緒に参加させてもらった。

ダンスのクラスには、ダウン症の男の子がいた。私は、障がいを持つ方と同じクラスで授業を受けることがなかった。初めは戸惑った。いざ授業が始まると、先生は、日本から来た私もその男の子も他の生徒も皆、同じように接してくださった。生徒たちは、国籍の違いや障がいの有無、性別の違いは関係なしに、お互いに教えあったり、アドバイスをし合ったりしていた。

「これは、僕が飼っているゴールデンレトリバーなんだ。とてもかわいいでしょ。」とダウン症の男の子はスマートフォンでホーム画面を見せながら紹介してくれた。みんながダンスを踊っていたので、私は躊躇った。

私は、「Cute」と答えるのが精一杯だった。しかし、彼は、自分のパートになると自然に踊りに入ってしまった。彼は授業が終わると、握手をし、私のパートナーと一緒に私を集合場所まで連れて行ってくれた。みんなが笑顔で自分らしさを表現できる感じのよい、居心地のよいクラスだった。

カナダはアメリカと同様、移民によって形成されていて、一つの国で様々な人々がお互いの文化を尊重しながら生活している。いわば地球の縮図だ。そうした中で、「個人の違い」は、人々の交流を妨げるもの・自由を奮うものにはなっていないことを実感した。

しかし、日本はどうだろう。時に他国からの影響を受け、時に他国との国交を断絶しながら島国の中で独自の文化を発展させてきた。その文化は、世界中から注目を集め、「おもてなし」や「もつたいない」といった賞賛される面をたくさん持っている。しかしその日本文化の特徴のため、「人権」を侵害してしまう

こともあると私は思う。

授業中みんなで声を合わせて音読をするとき、大きな声を出している人が白い目で見られることがある。音読は声を出すことが目的だから、その人が非難される筋合いはない。だが、「空気読めよ」という視線や雰囲気クラスに漂っている。また、先生に挙手を求められたとき、まずみんながどうするか顔色を窺ってしまふ。私もその空気を作る一人になってしまっている。

これは、日本人の根底にある「集団は画一的であるべき」という意識によるものだと思う。日本人の中で互いに違いを探し、それを排除し、同質性を持つ集団をつくる。次は自分が排除されるかもしれないという恐怖心を抱かせ、同時に、自分は排除する側だという優越感も感じさせる。この慣習が、「誰かを傷つけること」「自分の個性を失わせること」「他人の人権を奪うこと」「自分の人権も侵されていること」に繋がっていると頭では理解しているながらも、私たちの根底にあるのではないだろうか。

日本は、長い間この国からも植民地支配を受けず、独自の言語と文化をつないできた。そうした中で私たちの生活に染み付いた文化を覆すのはとても難しい。これをまずは「おかしい」と感じる事が大事なのではないか。

私はカナダで体験した安心できるクラスがとても魅力的に思える。障がいの有無や性別、性的志向、人種、国籍に関わりなく、平等に生活する。それを通して、他者との違いを認め合い、互いに人権や尊厳を尊重することができると思う。

今の自分にできること

長与町立長与中学校 三年 植園 鼓

「皆と同じように平等に接する」

これは私の両親が言った言葉である。私はこの言葉こそ今の現代社会に必要なことだと思っている。もちろん現代社会においては、「多様性を認め、互いを尊重すること」は当然のこととして広く認識されている。しかし、いまだにいじめや差別が完全になくなったとは言えない現状があるからだ。

私の弟は発達障がいを持っている。障がい名は自閉スペクトラム症、通称自閉症。自閉症の特徴は、言葉や表情、視線、身振りなどから相手の考えていることを読みとったり、自分の考えを伝えたりすることが苦手であると言われている。また、特定のことには強い興味や関心を持ち、こだわりの行動があるのだそうだ。

弟はたいていもごもご話す。音読の時などは特にその傾向が強い。計算カードを声に出して言う時も、私たち家族は弟にもものすごく近づいて聞かなければならない。また、負けるということが大嫌いで、テレ

ビゲームで負けた時などは、一度中断してやり直すほどだ。ゲーム好きなもう一人の弟は、せっかく勝ったのに中断させられることがしばしばで、怒っていることがよくあった。私は、その「負けを認めない」弟の一面が苦手だった。

そんな弟も、放課後デイサービスや病院での言語トレーニングに通い続けたことで、今では会話に困るということはほとんどなくなつた。ただ、やはりどうしても苦手なのは、「負けを認める」ということだった。

弟のなかなか改善されない部分を、弟自身が自分で克服するということはひじょうに難しいと思う。そこで大切になつてくるのは家族のサポートだろう。私も何かしてやりたいという思いはあるものの、何を言つてやればよいのか、してやればよいのかわからなかつた。そこで、弟を一番見てきた母に話を聞き、アドバイスをもらおうと思つた。

母は、自分の子どもに障がいがあると知つた時、悲しかったが、早くわかつてよかつたとも思つたそう。中には、子どもに障がいがあることを認めることができず、子どもにそのことを伝えられないでいる親もいるのだそう。私はその親の気持ちもよくわかるが、自分に障がいがあることを知らずに、苦しい思いをする子どももいるのではないかと思つた。母も、「知らないことが必ずしもよいことではない」と感じたそう。幸いにも弟は、三歳の時に障がい判明し、それから五年間、病院や施設でトレーニングを頑張っているの、早めに対処できてよかつたと思つた。

また、母の話では、役場の福祉課の方たちにもかなりサポートをしてもらったそうで、家族が障がいを持つていることは大変だが、家族以外のたくさんの人たちに支えられているという事実を知って嬉しかった。

私はこれまで、障がいを持っている人たちは、社会的にあまり認められてなくて、人一倍つらい思いをしているのだと勝手に思い込んでいた。しかし、役場などの行政や施設、病院、学校など、身の回りのさまざまなところで支えられていることがわかった。障がいを持つ人にも優しい社会になってきていることを知り安心した。

私が中学二年生の時の国語の教科書に、障がいのある方が書かれたこんな文章が載っていた。

「障がいは身体の中ではなく外にある。」という考え方がスタンダードになりました。(中略) 私が二階に行けないのは私の足に障がいがあるからではなく、エレベーターがないからだ。だから、社会や環境の側を改善していこう、と考えるわけです。

さらに筆者は続けてこう述べている。

社会は案外優しい場所なんだ。

これは脳性まひの障がいを持つ筆者が、実際に社会に出て、いろいろな人たちに支えられたからこそ言える言葉だと思う。

私は、母の話聞いたあとにもう一度この文章を読み返してみても、この筆者の言葉にとっても共感した。

そして、改めて考えた。

私たちが家族が弟にできることはいったい何なのか。

それは、弟が助けを求めている時や困っていることを、素直に「困っている」と言える環境を作ることだと思った。弟が負けることを嫌うのは、自分の弱いところを見せたくないと考えたからだろう。だからこそ、負けても、弱いところを見せても大丈夫なんだと、弟自身が思える環境を作ることこそが、今の私たちにできる最大限のサポートだと思う。

障がいがあってもなくても、皆同じように個性を認め、「あなたはあなたそのままがいいんだよ」といえる環境を作ること。それが互いの人権を守る一歩になると信じている。

吃音があつても

佐世保市立大野中学校 三年 岸野羽汰

僕は生まれつき弱視です。だから小学校にあがつてからずっと弱視学級に所属しています。小学一年生から三年生まで松尾先生という女性の先生が僕の担任をしてくれました。弱視学級は僕だけだったので、松尾先生とは三年間、毎日勉強をしたり、植物を育てたり、たくさんの本を読んでもらったりして、長い時間を二人で過ごしました。とても大好きな先生でした。お母さんのような先生でした。四年生に上がる時に松尾先生は他の学校に転勤になり、お別れすることになりました。僕は大きなショックを受けました。家でずっと泣いていました。松尾先生がいらない学校には行きたくないなあと思っていました。

そして、四年生に進級したと同時に、僕は口から言葉が出しづらくなりました。うまく話せないのです。今まで普通に話せていたのになぜか言葉が出てこないのです。心配した両親が病院に相談したところ「吃音」と言われました。そして「言葉の教室」という訓練に通うようになりました。母は言葉の教室の先生から「精神的なショックが原因の一つかもしれない。」と言われたそうです。僕は松尾先生との別れのせいで

吃音になってしまったのだと思いました。松尾先生がずっと僕といってくれたら吃音にならなかったのと思いました。

吃音にも色々なタイプがあります。僕の吃音は、最初の音でつまってしまい、次の音がなかなか出でないタイプです。「あ、あ、あ、あ・・」と同じ音が何度も出てしまいます。一度つまってしまうと、息が苦しくなり、顔が真っ赤になります。うまく自分が思っていることを人に伝えることができないので、少しずつ人と話すことがいやになっていきました。

そんな時、言葉の教室の先生から「吃音がある人の集まり」に誘われました。僕たち家族はその集まりに参加しました。そこには小さな子供から、高齢の方まで幅広い年齢層の方がたくさん参加していました。僕は吃音がある人がこんなにたくさんいるなんて知らなかったので驚きました。そこで、一人の大学生のお兄さんからの話を聞きました。吃音のせいでいじめられたこと、家に閉じこもっていたことなどを話されました。しかし、そんなつらいことがあったその方は、自分の力で乗り越え、新しい道を自分で進んでいると言われていました。堂々と発表されていて、本当にかっこよかったです。その後、参加している人たちの前で発表する時間がありました。希望者だけでしたが、僕はそのお兄さんの話を聞いた後だったのでおもしろい自分から手を挙げて発表しました。とても勇気がいりました。だけど、そこにいるみんなが僕の発表を優しく聞いてくれました。

その集まりに参加したことで、僕は自分の吃音が珍しいものじゃないと思えました。吃音が出ると恥ず

かしいと思う気持ちは今もまだあります。まだ人と話すことは苦手です。授業中に発表することもあまりできません。僕の生活の中で、誰も僕の吃音を笑いません。一度も馬鹿にされたこともありません。僕の友人は吃音が出たときも、何も言わず僕が話し終わるのを待つてくれています。それなのに恥ずかしがっている自分から抜け出したいと思っています。僕はあのお兄さんのように堂々と生きていきたいと思いません。一度しか会っていませんが、僕の目標とする人です。

僕は来年高校生になります。高校生になるとつと自分の意見を伝える機会が多くなると思います。「どもつたらどうしよう。」「みんなに笑われないかな。」という不安を捨てて強く自分らしく生きていきたいです。みんな体や心にそれぞれの個性があります。僕の弱視も吃音もただの個性です。理解して支えてくれる人はたくさんいます。松尾先生との別れのせいだと思っていたこの吃音も僕の個性だったのです。誰のせいにもせず、自分らしく生きていきたいです。

松尾先生は今でも励ましのお手紙をくれたり僕のことを気がけてくれています。今でも大好きな先生です。そんな先生と将来再会することができたとき、堂々と自分の意見が言える素敵な大人になりたいと思っています。それも僕の大きな目標です。

「すみません」が要らない日へ

島原市立第二中学校 三年 亀川 昂 暉

「すみません。」

僕の耳に届いたこの一言。まさか僕に発せられた言葉とは夢にも思っていなかったので、とつさに反応できなかった。それはスーパーで買い物をしていたときのことだ。会計を済ませ、購入した商品をマイバックに入れていたとき、先に同じテーブルで商品をマイバックに入れていた高齢の方と僕は目が合った。すると、その方は「すみません」とつぶやき、慌てたように、急ぎ足で店を出て行ってしまわれたのだ。どうして僕に謝ったのだろうか。そのあとの僕はもやもやした気持ちで家へ帰った。帰る道中も、その方が発した「すみません」の言葉が心に重く残っていた。すると、同じような光景が以前にもあったことを思い出した。それは、高齢の方がバスを降車しようとしていたときのこと。バスの前方に座っていたその高齢の方に続いて、何人かが降車のために並んでいた。すると、その高齢の方がバスから降りるとき、「すみません」とつぶやくように言ったのだ。今日のスーパーでも、あのとときのバスでも、どうして「すみま

せん」とおっしゃったのだろうか。この数日後、僕の疑問の答えと思われるが、思いたくない光景を僕は見てしまった。

新鮮で手頃な値段のものが手に入る、産直販売店でのことだ。ある高齢の方がとある商品を買おうかどうか吟味されているとき、その方よりもずっと若い人が冷たい目でこう言い放ったのだ。

「こつちも待っているんですよ。早く決めてください。」と。

すると、その高齢の方は、

「すみません」

と言い、急いで店を出てしまったのだ。自分は動作が遅いからみんなに迷惑をかけているという思いが、あの「すみません」を言わせてしまっているのではないだろうか。どうしてこんなことが起きてしまうのだろうか。どんな人でも、自由に物を買う権利や悩む権利はあり、これらの権利を失わせることはできないはずだ。

今年の七月、僕は福祉体験学習で高齢者疑似体験を行った。手足を自由に動かさづらくする重りや装具、腰を曲がったままにする装具、白内障の視覚にする装具、これらを付けて僕たちは高齢者となった。「腰が伸びん」などみんなは口々に感想を言いながら、高齢者疑似体験をした。それでもともと筋力がある僕たちは、動くことができた。しかし、高齢の方は、そう簡単には動かせない。中には病気で思うように動けない方もいる。そして、商品や文字を見ようとしても、見えづらいから文字を読むまでに時間がかかっ

てしまうだろう。そんなことを私たちが理解できていたら、高齢の方の「すみません」は要らないのだ。あのとき産直販売店で、「どれもきれいで悩みますね。一緒に見ていいですか。」と声をかけて一緒に見る事ができたなら、高齢の方も若い人もどちらも嫌な気分にならずに済んだと僕は考える。

そんなことを考えている僕に、ニュースを読み上げる声が突き刺さった。今年も酷暑が連続する夏。一人暮らしの高齢の方が熱中症で死亡していたというニュースだ。高齢の方は暑さを感じにくいそうで、冷房を利用していなかったことが原因らしい。しかし、それだけではないと思う。体調がなんだかおかしいと気づいても、周囲に助けを求めることを申し訳ないと思い、自分で何とかしようとしてしまっているからではないだろうか。周囲の人に迷惑をかけないようにという、思いやりの心がそうさせるのだろう。

思いやりの心。これは誰も持つっていると僕は信じている。僕も友人の思いやりのある言葉に救われたり、勇気を持てたりしたことがある。この思いやりの心は身近な人のためだけに発揮されるべきではない。店舗などで出会った高齢の方に対しても発揮されるべきだ。

「すみません。」

と言われたときは

「いえいえ。どうぞお構いなく。」

「急いでいませから、大丈夫ですよ。」

という思いやりのある言葉を投げかけただけで、その場の空気が和むばかりでなく、この場に居合わせた

人が別の場所でも思いやりの心を発揮することができる。この思いやりの連鎖が地域に広がっていくことが、高齢の方の孤独死をなくすことにもつながっていくのではないだろうか。こんな当たり前のことを一人一人が継続していくことが、人権を尊重するということなのだ。相手を思いやるばかりに発せられる「すみません」が要らなくなる日が来るように、僕は「急いでいませんから、ゆつくりでいいですよ。」と笑顔で言い続けたい。

大きな家族

大村市立西大村中学校 三年 下田 愛

みなさんは、「『家族』とは何か？」と質問されたら何と答えますか。「いて当たり前な存在」それとも「考えたことがない」ですか？プラスのイメージを抱く人、マイナスのイメージを抱く人など一人ひとり抱くイメージは違い、たくさん出てくるでしょう。私の思う本当の「家族」は、血の繋がりよりもその人のことを「家族」と思うことだと思います。なぜそう思うかというと、私は幼い頃から児童養護施設で暮らしているからです。私は生まれて少ししてから施設に来ました。母親がいて母親の名前は分かっていますが、兄妹がいるかどうかは分かりません。さらに、一度も母親に会ったことがありません。なので、私は「家族」や「兄妹」、「家」というものに憧れをもっています。自分がまだ幼い頃、手を繋いで笑い合っているながら歩く親子、欲しいものをすぐ買ってくれる親などがとてもうらやましく、「なんで母親がいらないんだろう。」と書いていました。遂には、自分を産んでくれた母親を恨み、「死にたい。」と思うようになりまし

小学生になると、「お前、お母さんおらんとやろ？」などと事情を知っているかのように自信満々な顔で言われることがありました。自分でも母親がいない理由が分からないから自信満々な顔でいう人に「さあ、どうやろうね。教えんし。」と笑顔で返すことしかできませんでした。本当は涙が出るほど悔しかったです。でもそんな時、今はもういない施設の先生に「大丈夫。愛にだってお母さんはいるよ。だってお母さんがいないと産まれてきてないもん。また言われたら言いにおいで。ぎゃふんと言わせてやるから。そして、そういう人は無視しなさい。構ったらキリがないから。」私は初めてこの先生に言つて良かったと思えました。その日から、「なんでお母さんおらんと？捨てられたと？」などと言われても無視してその場から立ち去ることができるようになり、先生のおかげでまた一つ強くなれました。「ありがとう」と伝えたいです。

施設での生活は正直嫌です。掃除、食器洗い、洗濯物、…。自分のことは自分でしないといけないからです。でも、施設でしかできないことや楽しいことはたくさんあります。その中でも一番好きな行事は、オータムフェスティバルです。一年で一番大きな行事といっても過言ではありません。新型コロナウイルスの影響でここ数年開催されていませんでしたが、今年からまた復活し開催されることになりました。それを聞いた時は、めちゃくちゃ嬉しかったです。なぜなら、たくさんのお客さんやゲストが来て退屈になる時間がないからです。

元気よく空高く立っているたくさんの緑、ベージュと白の安心感がある建物、日によって違う温かいご飯

などが、「ここに来て良かった」と感じさせてくれます。施設での生活は、必ず、自分の将来を助けてくれると思います。

親が子供を虐待するニュースは年々増えており、見るたび聞きたび胸が苦しくなります。でも、私はそんなとき、施設みんなのことを考えます。誰一人として血は繋がっていないけれど、一つの大きな「家族」だと思っからです。困った時に寄り添ってくれる人、厳しいけど自分のためを思っ言っしてくれる人。私にとっ、施設、先生、そして一緒に暮らしている子たち、全部が大事な存在であり、「宝物」でもありません。そんな人たちのことを簡単に手放さず、心の奥深く大事にしまっおきたいです。

自分を産んでくれた母親、たくさんの愛情を注いで育ててくれる先生方、周りにいる友達などに感謝し、一日一日を大切に生きていきます。そして、これからの長い人生を強く真っすぐに歩んでいきたいです。

ノーモア ミナマタ

五島市立翁頭中学校 二年 餌網代 祥子

みなさんは、『水俣病』を知っていますか。

『水俣病』は、熊本県の水俣市に起こった日本四大公害の一つです。水俣湾の魚介類を大量に、長い期間食べることで起こる中毒性の中樞神経の病気です。その原因は、チツソ株式会社から、メチル水銀という強い毒性を持った物質を工場排水と一緒に水俣湾に流したことです。その症状は、手足のしびれや、脳に問題が起きて、体の震え、脱力、まっすぐ歩けない、目の見えにくさ、耳鳴りや難聴、話しくくなるなど様々です。

私は、修学旅行で水俣病資料館へ行くことを知り、この『水俣病』について興味を持ちました。そして、調べていくにつれて、公害が招いた人権侵害について知りました。

水俣の人たちは、五島に住む私たちと同じように魚介類をたくさん食べたことにより病気になりました。医食同源、食事はとても大切です。しかし、この食が毒になりました。いえ、人によって毒に変えられて

しまったのです。

しかし、この原因が分かるまで、この病気は奇病と言われ、この病気に侵された人は差別を受けました。患者が出た家は避けられ、当時は水俣出身というだけで、就職や結婚もままならなかったそうです。

『水俣病』と言えば、ふらふらと歩き海へ落ちる猫の映像があります。その猫と同じ動きをする人間を見て、周りの人たちは、「猫と同じように狂った人間」と思ったそうです。なんてひどいことを言うのだろうと思いますが、原因が分からないものが広がる恐怖を、水俣病を知らない私たちも知っているはずですよ。それは、新型コロナウイルス感染症です。あつという間にたくさんの人へ広がる感染症に世界は恐怖を感じ、この数年は大変だったはずですよ。

でも、公害は、今の言葉で言う『人災』に近いと思います。公害は、高度経済成長期に起こった病気です。戦争で衰退した日本の経済をこれらの地域をはじめ、日本の色々な工場が頑張つて盛り返してくれました。そこに働く人たちは、誇りに思っていたはずですよ。しかし、問題が起きました。

『水俣病』という公害は、病気と環境問題のどちらも解決しなければいけません。今は、工場からの排水や排気は有害物質が含まれていないか確認することが義務になっています。

しかし、病気は治ることはありません。体に現れた症状とは、生きている限り続けなければならぬのです。当時、お母さんが魚を食べたことで、胎内で栄養を分けてもらっていた赤ちゃんも病気をもって生まれたことがあるそうです。お母さんも赤ちゃんも、きつとつらい思いをされたと思います。人権と

は、人が人として生まれた時から持っている生きるための権利だと、私は考えます。安全に生きる権利です。漠然としています。私にとって人権とは、平穩無事に幸せに生きる権利だと感じました。これらは、学校の試験より難問ではないように思えるのに、こんなに色々な人が考え続けなければならないのはなぜなのか分かりません。しかし、この『水俣病』という公害を通じて、私は勉強し続けなければならない理由が分かった気がしました。

公害や戦争の被害で苦しむ方はたくさんおられます。しかし、人の寿命は永遠ではありません。そして、人の経験は、遺伝することはありません。それは、とても危険なことだと感じました。

私が、この『水俣病』というテーマを選んだ時、母は嬉しいと言ってくれました。母は、熊本市の生まれですが、小学生の時に通学路で署名活動で流れていた歌を歌ってくれました。

「ノーモア ミナマタ」

この「ノーモア」とは、くり返さないという意味です。くり返さないためには、過ちを学ばなくてはいいけないと思います。知らなければ、また同じことをしてしまうかもしれません。また、知っているのくり返してしまうこともあるかもしれません。だからこそ、しっかりと学んだ上で、「No more」と声を上げ続けなければいけないと思います。

すべての子どもに・・・

平戸市立生月中学校 三年 白石真惟

「すべての子どもに、□□を」

みなさんなら、□□にどんな言葉を入れますか。この言葉は今年の四月下旬に配られたユニセフの学校募金のチラシにのってあった言葉です。私はこのチラシに興味を持ち、世界の子どもたちについて調べてみました。

まず、教育面についてです。世界の六歳〜十七歳の子どものうち約二億五千八百万人、六人に一人は学校に通えていないことがわかりました。学校が近くにない、学校があつたとしても先生がいない、家計が苦しい、家事や水汲みをしなないといけないなどの理由で学校に行くことができないそうです。私はこのことを知り、今の自分と重ね合わせてみました。私は父に、「世界中には学校に行けない子どもたちもいるのだから、学校に行ける、勉強できるということは幸せなことなんだよ。」と教えてもらったことがあります。この言葉を聞いた時、私はほんやり納得しただけで、軽く受け取ってしまった事を反省しました。また、学校に

行くことができない子どもたちの中には、女の子であることを理由に教育を受けることを許されなかったり、戦争や政治不安によって、教育の機会が奪われている子どもたちがいるということもわかりました。私はこの事実を知った時、とても悲しくなりました。それと同事に不条理な性差別や子どもたちとは全く関係のない理由で始まった戦争によって、学校に行けなくなってしまうのかと怒りの感情も芽生えました。

次に保健・衛生面についてです。世界で約五百二十万人の子どもたちが五歳の誕生日を迎えることなく命を落としているそうです。一日約一万四千人の子どもたちが五歳未満で亡くなっている事になります。その大半は先進国ならばたやすく予防・治療できる病気が原因となつています。私は、この事を初めて知り、心が痛みました。私達は、ウイルスなどに感染しないように当たり前に予防接種を受けています。体調が悪かったり、怪我をしたりすると、当たり前のように病院に行つて、お医者さんに診断・治療をしてもらいます。しかし、同じ地球上にはこれらが当たり前ではなく、苦しい思いをしたまま命を落としてしまう子どもたちがいるのです。

先日、私は眼科に行つた時にあるポスターを目にしました。それは、ヤングケアラーについてのポスターでした。

「子どもが子どもでいられる街に」

素敵な言葉だなと思いました。そこで私は、ヤングケアラーについても調べてみました。想定されている家事や家族の世話などを日常的に行っている子どものことです。家族のケアをすることで、ヤングケア

ラーの子どもたちは、勉強や睡眠などの自分のための時間が十分に取れない、ケアについて話せる人が周りにいなくて孤独やストレスを感じる、友人と遊ぶことができないという、悩みや苦悩があるそうです。私は、家で母に手伝いを頼まれると、つい面倒くさいと思うことがあります。今回、ヤングケアラーについて調べ、そんな自分が恥ずかしくなりました。そして、ヤングケアラーの子どもたちを心から素敵で尊敬できると思いました。

今回、毎日学校に通って勉強する。体調が悪かったら病院に行く。毎日三食食べる。休日に友達と遊ぶ。これらは、子どもの私にとって、当たり前では無いと気づくことができました。世界には生きてくても生きられない子どもたち、やりたいことをやれない子どもたち、やってもらえないことをやってもらえない子どもたちが大勢います。子どもにも人権があることを世界中の人々にもう一度しっかりと理解してもらい、さらに、私自身の今の現状のありがたさ、幸せを絶対に忘れてはならないと強く感じました。

では、今、私にできることは何かないのでしょうか。私は、世界の子どもについて調べている中で、ユニセフが世界中の子どもたちの命と健康を守り、教育を受ける環境を作っていることを学びました。これからは、ユニセフのような団体について深く勉強し、私がやれる事を探していきたいと思えます。そして、将来、世の中の子どものために働ける職業に就けたらと思えます。

私は、最初の問いに答えるのならば、□□に「子どもらしさ」を入れて、「すべての子どもに、子どもらしさを」という文章を作ります。最後にもう一度質問します。みなさんなら□□にどんな言葉を入れますか。

「理解することの大切さ」

雲仙市立千々石中学校 三年 池 本 きずな

私は、こんな話を聞いたことがあります。

「あの人は病気を持っているから、少し距離を置いてしまった。」と。

私も、自分の病気のことについて触れられると嫌だろうなと思い、避けてしまうことがありました。

でも今は、自分に出ることはなんだろうと考えるようになりました。では、なぜ、このような考えをもつようになったのか、体験をもとにお話したいと思います。

私は、普通に行っていると、普通の人と同じように、何のハンデも無いように見えます。ですが、中学生になり、精神疾患を発症しました。

実は、小学校三年生頃から、あることをきっかけに、毎日死にたい、生きていく意味って何だろう、と考えるようになりました。そして、実際に、自殺行為をしかけたこともあります。中学生になり、初めは楽しいことが多かったのですが、二年生辺りからはプレッシャーを感じるようになり、こんな簡単なこと

がなんでできないのと、自分自身をよく責めるようになりました。そしてそんな気持ちを抱え込み過ぎた結果、倒れてしまい、病気を発症してしまいました。

病気になってから「可哀想」や「めんどくさいから関わりたくない」などと言われることもあり、自分からあまり病気のことは話さなくなりました。でも、私だけではないと思いますが、持病者の方、障がい者の方などは変な目で見られたくないという考えがあるため、話したくても話せないこともあると思います。私も、そうでした。

ですが最近、身近な人に病気のことについて話してみたところ、「辛いのに話してくれてありがとう」「今までよく頑張ったね」「これからは話聞くからいつでも頼ってね」と優しく声をかけてくれました。私はその時、安心感からホッとし、誰かに話してもいいんだ、と心が軽くなり、とても救われました。それから、辛いことがあっても大丈夫、と思えるようになり、一人で抱え込まずに、生活できるようになりました。

私は、この病気になって、大切なことに気づくことができました。

それは、問題を一人で抱え込まずに、誰かに相談することです。私は、先ほど話したように、とても頼りになる優しい方がいてくれたおかげで、今では気持ちが悪くなりました。相談するのは相手の負担になる、と考えてしまう方もいると思いますが、私は相談してよかったと思っています。相談することで、心に余裕がもてます。そして、話し合うこともできるため、相談することはとっても大切だと思います。

今では、辛い人の、役に立ちたいと思い、できるだけ、人の話を聞くようにしています。

だから、みなさんも、多少の偏見はあると思いますが、変な目で見たり、差別をしたりするのではなく、その人のために、できることは精一杯してほしいと思います。その少しの行動だけで、目の前の人を救うことができるので私が救われたように、できるだけ多くの人を救ってほしいと思います。

そして、もう一つは、すべての人に同じように権利があるということです。私は誰かに相談することの大切さを知った際に、病気のことでも障がいのことでも、皆、気軽に話すことができ理解される権利があるはずなのに、偏見だけで理解してもらえない、というのは間違っていると思いました。だから、偏見を持つのではなく、真相を知り、相手のことをよく理解し合う必要があると考えました。

私は、自分の病気を通して、こう伝えたいです。「偏見をもつのではなく、まずは自分から理解しようとするのが大切だ。」と。

今の世界には偏見の心を捨て、自分に関わってくれる人、周りの人、沢山の方々を大切にしていきたいと思う人が、一人でも増えることが必要だと思います。人が人として大切にされる。それが人権です。人権は、お互いがお互いの心を理解しようとし、大切にすることで守られます。まずは、自分から困っている人や苦しんでいる人に手を差し伸べ、人権を大切にできる人になりたいです。

今までの自分とは違う、より良くなった自分に出会うために。より良い世界に出会うために。新たな一歩を踏み出していきたいと思います。

一つの言葉や行動で

杵岐市立郷ノ浦中学校 一年

みなさんは、いじめについて深く考えたことはありませんか。私自身、いじめという言葉はよく耳にしましたが、自分には身近ではないと思っていました。しかし、小学生のころ、心が折れて学校に行きたくなくなったことがあります。その時から、いじめについて真剣に考えるようになりました。

新学期になって頑張ろうとやる気になっていた矢先、その気持ちが一瞬で崩れる出来事がありました。それは、言葉によるからかいです。変なあだ名を毎日のように言われました。最初は、冗談半分だと思うようにして、少し笑う余裕もありました。しかし、途中から言われる言葉もひどくなり、回数も増えていました。余裕がなくなりました。何より、一人から二人とだんだん言う人が増えていくことが、怖くなりました。夜、「次はどんな言葉が自分に突き刺さるのだろうか」「明日はどれだけ自分の心が傷つくのだろうか」と一人で考えていると、怖くて眠れませんでした。それから、陰口も言われるようになりました。自分を見ながら話しているグループを見ると、自分の顔や体のことを言われているのではないかと思うよ

うになりました。また、ある日、マスクの色が水色でAさんと被ってしまった時がありました。Aさんは、最初は気にしていない様子でしたが、グループの中で話していたAさんが急に私の方を見ながら、

「パクられた、最悪。いやなんだけど。」

と言っているのが耳に入りました。私はその言葉が一瞬で胸に突き刺さりました。それから、周りの人が何か話をしていて目が合ったら、自分のことを言われているのだと不安になって、自信がなくなりました。だんだんと笑顔を作るのが精一杯になりました。それでも毎日ががんばって笑顔を作ろうとしました。自分をごまかし「大丈夫、大丈夫」と心の中で言い聞かせ、耐えていました。しかし、気づいたら、人の目ばかり気になって発表ができなくなりました。また、大きな声で自分の意見を言うことが、いつのまにか難しくなっていました。何か言われたらどうしようと怖くてたまりませんでした。一つの言葉や行動でこんなにも自分が変わっていくのかと、本当に情けないと思いました。

しかし、私が「もう学校に行きたくない。学校なんて嫌だ。」と思った時、保育園から仲の良かった友達と家族に支えられました。友達は、いつもと変わらず遊んでくれました。何気ない会話にどれだけ元気づけられたことでしょう。こんな私でも一緒に過ごせる仲間がいるのだと、安心させてくれました。家族は、私が相談した時に真剣に話を聞いてくれ、「味方だよ。」と私を勇気づけてくれました。それらのおかげで、少しずつ自分に自信が持てるようになりました。発表もその当時に比べて、自然にできるようになってきています。

私が体験したことは、いじめとは言えないくらい小さなことかもしれませんが、私に陰口を言った人も、言ったことを忘れているかもしれない。しかし、私は忘れたくても忘れることができません。私はこのことで、自分らしく生きていくことが難しくなりました。これは、人権が守られているとは言えないと思います。人権とは全ての人々が平等に自由な発想ができ、自由に発言や行動できる権利だと私は思います。それが実現できるために、これから周りに昔の自分と同じような思いをしている人がいたら、見て見ぬふりをせずに、寄り添っていききたいです。また、私の友達がしてくれたように、声をかけて支えてあげられるような存在になりたいと思います。そして、いじめを他人事だと思っている人に、すぐ近くで起こることなのだ伝えていききたいです。

私にできることは、ほんの小さなことかもしれませんが、人権を守る第一歩だと信じてこれからも自分に何ができるのかを考えながら生きていきたいと思えます。みなさんにも、いじめは身近に起こりうるかもしれないと感じて欲しいです。その時見て見ぬふりをするのではなく、自分に何ができるのかを考えてみてください。

私が大切にしたいこと

島原市立第一中学校 一年 梅田光志

「もう何回も聞いたってば！」

僕は、何度も何度も同じことを繰り返す曾祖母にうんざりして、そう怒鳴りつけていた。その時の曾祖母は、笑っていた。でも必死に涙をこらえてもいた。

僕の曾祖母は、とてもやさしい人だった。熱を出したときは、軽トラックに乗せて病院に連れて行ってくれたし、大好きな混ぜご飯を作ってくれた。勉強だって、分かりやすく教えてくれた。そうやって、僕にたくさん愛情を注いでくれた。そんな曾祖母が大好きだった。だが、いつの間にか曾祖母は変わってしまった。それが「認知症」の症状だと知った時、僕は頭が真っ白になった。

曾祖母が認知症だと知ってから、ニュースや新聞で、「認知症」や「高齢者」について調べるようになった。すると、現在、六十五歳以上の五・四人に一人は認知症だということが分かった。また、老老介護や介護のストレスから虐待をしてしまうなどの悲しいニュースも目にした。

認知症について知れば知る程、あの日のことを後悔した。認知症だと知らなかったとはいえ、あんなにひどい言い方をしてしまうなんて。「ごめん、ごめん」と言う曾祖母の悲しそうな表情を思い出すと、今度僕が悲しくなってきた。さらに、曾祖母は、何でもすぐに忘れていく自分に自信を無くして、あまり話さなくなってしまった。僕のせいで、そんな言葉が頭をよぎった。後悔の念は増すばかりだった。そんなある日。曾祖母に会いに行くと、「この人誰だったっけ。」と僕に聞いてきた。心の中で「ひいおばあちゃん大丈夫かな?」「こんなことも分からなくなっちゃったの?」と戸惑ったのを今でも覚えている。しかも、それは何度も続いた。もう僕の知っている曾祖母はいないんだといわれているような、何とも言えない寂しさと悲しみが湧き上がってきた。友達とケンカしたときの悲しさや寂しさは、時間が解決してくれる。でも今回は、時間が経てば経つほどその気持ちは増していくばかりだった。曾祖母のできないこと、分からないことがだんだんと増えていったからだ。「なんで」、「どうして」が増えていき、曾祖母のことがどんどん分からなくなっていく。でもあるとき、母に「分からないんじゃない、分かるうとしていないんじゃない」と言われた。僕は、はっとした。こんなことも分からない、僕の知っている曾祖母じゃない、と決めつけて逃げていると気づかされたからだ。それからは曾祖母の気持ちを分かるうとたくさん話すようになった。分からない、教えてという曾祖母はなんだか小さい頃の僕の様で、あの頃が戻ってきたようで、懐かしかった。曾祖母への向き合い方を変えるだけで、こんなにも考え方が変わるのかと自分も驚きを感じた。

僕のように認知症の家族を持つと、大切な家族が変わっていく姿を目の当たりにすることになる。さつき食べたはずの朝ご飯をまだかまだかと急かしたり、いつも一緒に散歩に行っていた近所さんの名前を忘れてしまったり。家族の変化は、怖い。でも、僕らの記憶から優しかった曾祖母の姿は消えることはない。僕らとの思い出を忘れてしまっても、また新しい思い出を何度でも作ればいい。できないこと、分らないことにはばかり気を取られてしまうが、思い返してみれば、僕らだって子供の頃は何もできなかったではないか。たくさんのことを教えてもらったし、お世話してもらったことを思い出してほしい。今度、僕らの番だと、たくさんお手伝いをしてあげてほしい。僕たち家族は今、毎日笑顔で過ごしている。曾祖母の分からないに寄り添い、できないことも助け合い生活しているからだ。この世界がそんな思いやりのあふれる世界になれば、きつと虐待なんてニュースは無くなるだろう。すべての人がそんな優しい心を持った世界になればいいと僕は思う。

魔法の言葉

佐世保市立江迎中学校 一年 岡本悠吾

「まあいつか」僕の母がよく口にする言葉だ。何か辛い事があっても、悩み事があっても「まあいつか」と言って乗り越えるのだと言っていた。

言葉は、不思議な力があると僕は思う。その時の気持ちや受け取り方で、良くも悪くも心に影響を与えるからだ。だからこそ、一言一言を大事に、言葉を口にする時は気をつけないといけないと思うが、なかなか日頃から気をつけるというのは難しい。特に友達と遊んでいる時は、調子に乗って悪ふざけしたり言わなくても良い事を言ってしまったり、今まで自分でも気づかない内に誰かを傷つけて悲しい気持ちにさせてしまった事もあるのではないだろうか。

ハッとしたり。友達とゲームをしていた時の自分を思い出した。楽しくて夢中になると何も考えずに感情のまま、暴言を吐いている。例えば、戦闘ゲームをして負けてしまった時に「お前ふざけるなよ」「ガチうざい」など言われた友達がどんな気持ちになるのか考える事もなく、ひどい言葉を使っていた。

先日、友達数名と楽しくゲームで遊んでいた時、夢中になりすぎて、僕も友達も段々と言葉使いが荒くなっていった。「雑魚」「きもい」「下手くそ」そんなひどい言葉が飛びかうゲームの中で、一人の友達が「もういい」と怒ってゲームをやめた。普段あまり感情を出さない友達だったので怒った時はビックリしたが、その時僕たちが暴言を吐いた事で友達が嫌な気持ちになり、傷つけてしまったのだと気づいて、後からとても申し訳ない気持ちになった。自分が言われたら嫌な言葉、傷つくような言葉は言うべきではないのだ。

一度口にした言葉は消すことができない。だからこそ、自分の言葉には責任を持たなければいけない。相手の事を自分の事のように考え、思いやりの心を持って接したり、お互いのちがうところや多様性をちゃんと認め合いながら、誰もが傷つくことなく過ごしていける、そんな友人関係を築いていくためにも普段から言葉には気をつけながら、相手の立場に立つて物事を考えることも大事な事ではないかと思う。

「ありがとう」「お疲れさま」「ごめんなさい」言葉には力があり、受け取る相手は、その言葉によって嬉しくなったり、楽しくなったり、助けられたり、心が救われたりもする事がある。僕は親から「よく頑張ったね」「すごいね」と声をかけてもらうと、「よし、また次も頑張ろう」という気持ちになるし、「ありがとう、助かった」と言われると、また喜ばせたい、僕にできる事をしてあげたいと張り切ってしまう。言葉一つで自分のモチベーションも上がるし、言われて嬉しい言葉で、とても気持ちが温かくなるのだ。だから僕もできるだけ相手の喜ぶ言葉、嬉しい言葉を伝えたい。その為には、いつどんな時も相手を尊重

し大切に思い、感情のままに言葉を言わないように注意しなければいけない。それは簡単な事ではないかもしれないが、僕ができる事からやっつけていこうと思う。

日々の生活の中で、誰かの何気ない一言に傷ついたり、悲しい気持ちになったり、くやしくなったり、落ち込んだり、色々な事がこの先にあるかもしれないが、前を向いて自分らしく僕は僕の考える道信じて進んでいきたい。そして時に辛くなったり、苦しくなったり、悩んだりした時には、母がよくつぶやく「まあいつか」そうつぶやいて、前に進もうと思う。そうする事で僕の心は軽くなり、物事を良い方向へ考えることが出来るようになるからだ。自分が置かれた状況に対してネガティブな気持ちになっていてこそ、「まあいつか」と言うことで、その状況に対してネガティブからポジティブへ気持ちを切り替えることができるのだ。話す時、意識して口に出す言葉を選んでいる余裕はないかもしれないが、自分の口から出す言葉は、一言一言が自分の周りの人だけでなく、自分自身や自分の人生にも、少なからず影響を与えているから、僕は言葉は大事に使わないといけないと思った。

魔法の言葉、それは一つではない。誰かが嫌な気持ちになる言葉よりも、誰かが幸せな気持ちになるような、そんな言葉を探して、毎日を平和に過ごしていきたい。そのためにも、友達や家族を大切に、言葉を大切に、僕ができる事から始めてみよう。